

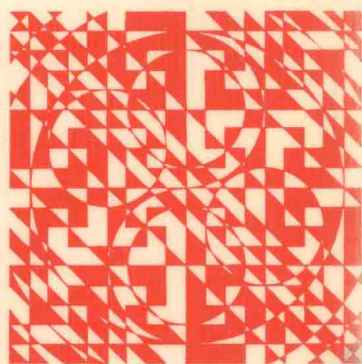
岩波講座

文学

7

表現の方法4 日本文学にそくして下

岩波書店



岩波講座 文 学

7

表現の方法 4 — 日本文学にそくして下

岩 波 書 店

〈執筆者紹介〉

- 前田 愛（まえだ あい） 1932年生 日本文学 『幕末・維新期の文学』『近代読者の成立』
十川 信介（とがわ しんすけ） 1936年生 日本文学 『二葉亭四迷論』『『家』の構造』
北川 透（きたがわ とおる） 1935年生 詩人 『幻境への旅』『詩集 反河のはじまり』
相馬 庸郎（そうま つねお） 1926年生 日本文学 『日本自然主義論』『もう一つのリアリズム』
越智 治雄（おち はるお） 1929年生 日本文学 『漱石私論』『明治大正の劇文学』
猪野 謙二（いの けんじ） 1913年生 日本文学 『明治の作家』『日本近代文学史研究』
磯貝 英夫（いそがい ひでお） 1923年生 日本文学 『昭和文学作家研究』『資料集成日本近代文学史』
飛鳥井 雅道（あすかい まさみち） 1934年生 日本近代文化思想 『近代文化と社会主義』『坂本竜馬』
小笠原 克（おがさわら まさる） 1931年生 日本文学 『島木健作』『昭和文学史論』
小田切秀雄（おだぎり ひでお） 1916年生 日本文学 『二葉亭四迷』『現代文学史 上下』
中村 俊一（なかむら しゅんいち） 1926年生 演出家 秋元松代『村岡伊平治伝』 マルシャーク『森は生きている』の演出
天沢 退二郎（あまざわ たいじろう） 1936年生 詩人・フランス文学 『詩集 時間錯誤』『宮沢賢治の彼方へ』
兵藤 正之助（ひょうどう まさのすけ） 1919年生 日本文学 『正宗白鳥論』『坂口安吾論』
南坊 義道（なんぼう よしみち） 1930年生 作家 『夜の幽閉者』『深くわが汝より』
真継 伸彦（まつぎ のぶひこ） 1932年生 作家 『鮫』『親鸞』
大原 富枝（おおはら とみえ） 1912年生 作家 『婉という女』『建礼門院右京大夫』
篠田 浩一郎（しのだ こういちろう） 1928年生 フランス文学 『ゲーテの木』R.バルト『サド、フーリエ、ロロラ』（訳）
菅野 昭正（かんの あきまさ） 1930年生 フランス文学 『小説の現在』サロート『プラネタリウム』（訳）

岩波講座『文学』7 表現の方法4、日本文学にそくして下(全12巻 第7回配本)

1976年5月10日 第1刷発行 ©

1980年4月15日 第2刷発行

〒1900

発行者:緑川 亨／発行所:〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替 東京 6-26240／印刷:精興社 製本:松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩波講座
文学 7

目次

V 表現者たちの経験した変革期

1 旧体制内の表現者、啓蒙家たち	前田 愛	三
2 文学の改革者		

a 二葉亭四迷	十川 信介	三
---------	-------	---

b 北村透谷	北川 透	四
--------	------	---

——《「力」としての自然》をめぐって

c 正岡子規	相馬 庸郎	五
--------	-------	---

VI 近代文学の成立と危機をこえての成熟

1 小説の自覚	越智 治雄	八
---------	-------	---

2 日本自然主義とその対立者たち	猪野 謙二	九
------------------	-------	---

3 近代的な個我のさまざまな確立	磯貝 英夫	二四
------------------	-------	----

4 社会的自覚とプロレタリア文学	飛鳥井 雅道	一四
------------------	--------	----

5	批評の文学的自立	小笠原 克	二六
6	転向文学とモダニズム	小田切秀雄	二八
7	近・現代演劇の(不)成立	中村俊一	二〇三
8	現代詩歌の問題点	天沢退二郎	二三
9	戦争をどう受けとめ、どう生きたか	兵藤正之助	二四

VII 戦後文学による拡大と変革

1	方法的自覚	南坊義道	二六
	——二十一世紀へむけて		
2	宗教と政治	真継伸彦	二六
3	性の実存	大原富枝	三〇
4	世界的同時性	篠田浩一郎	三〇
5	全体性への構想	菅野昭正	三四

V

表現者たちの経験した変革期

1 旧体制内の表現者、啓蒙家たち

前 田 愛

—

福沢諭吉の『旧藩情』は、中津藩をモデルに旧幕時代の身分制度の実態がいきいきと再現されている貴重な記録であるが、その中に上士と下士、農民と商人のあいだでは、日常の話しことばまでが微妙に異なっていたことが指摘されている。たとえば、「見て呉れよ」と言う場合に、上士が「みちくれい」、下士が「みちくりい」、商人が「みてくりい」、農民が「みちえくりい」というように、それぞれの身分特有の訛りがあって、壁ごしに会話を聞いただけで、語り手の身分は明らかに知れたというのである。こうした言葉の階層化は、もちろん中津藩だけの特殊事情ではなく、福沢の表現をかりるならば、「天下一般、分を守るの教を重んじ、事々物々秩序を存して動かす可らざるの時勢」と正確に対応していたわけであった。いわば、無数に分断された三角形が、横へのひろがりやを閉ざされたままに、頂点に位置する幕府の権威と統制のもとに整然と階層化されるという、閉鎖的なコミュニケーションの構造が、三百年の泰平をつうじて純粹に培養されたのである。

身分制に応じて階層化され、無数の方言に分割されていた話し言葉の多様性は、その対極に話し言葉の現実から極度に抽象された単一の書き言葉を持たなければならなかった。聖賢の権威によって保証された儒学の言葉である。そ

れは中世ヨーロッパのラテン語がそうであったように、現実の話し言葉から超越していたために、一種の共通語としての普遍性をもつことができた。武士階級にとって儒学を学ぶことは、経世済民の治術や修身齊家の心術を知ることと併せて、普遍的な言語を習得することを意味していたのである。江戸時代における「文学」が、言葉によって人間を認識する人文学総体を包括していたかぎり、で、「文学」の首座に儒学が据えられていたことの意味も、ここに求められなければならないだろう。

「門閥制度は親の敵」と喝破した福沢のばあい、身分制度の解体が、閉鎖的なコミュニケーション構造の解放と不可分のものとして認識されていたことはいうまでもない。『学問のすゝめ』の冒頭で人間の原理的平等を明らかにした彼は、それにつづけて「文学」の首座を占めていた儒学の權威を果敢に否定する。

学問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽み、詩を作るなど、世上に実のなき文学を云ふにあらず。これ等の文学も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古来世間の儒者和学者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず。

儒学の言葉は、現実的な効用から遮断されていたが故に、もろもろの言葉の上に君臨する權威を保証されていたわけだが、「人間普通日用に近き実学」による個人の能力の開発を信じて疑わなかった福沢は、儒学の言葉にかわる普遍性をもった新しい言葉を創出する必要を同時代人の誰よりも痛感していたし、事実、彼はその課題を誠実に解き明かして行ったのである。では福沢によって否定された安定した身分秩序に対応する儒学の言葉はどのようなかたちを持っていたのか。そのひとつの典型を、幕末の碩学とうたわれた昌平黌儒官佐藤一斎の文章からさぐってみることにしよう。

西郷隆盛も愛読したと伝えられる佐藤一斎の名著『言志四録』の主題は、政治・学問・修養・養生・死生観等、き

わめて多岐にわたっているが、林家の塾頭時代から諸侯の招聘に応じ、自ら天下の師傳を以て任じていた一斎のもっとも主要な関心が、政治と吏務の要諦を説くことにあったのはいうまでもない。しかし、一斎は徂徠や白石がそうであったように政治機構の全体像を体系的に構成するよりも、その中にはめこまれた個人の役割や職分を具体的に規定することに執着する。一斎にとって政治とは何よりも先ず個人の心術に還元されるべき問題だったのである。一斎の信念は、国主(大名)・宰臣(家老)・吏胥(下僚)がそれぞれ与えられた職分にしたがってめいめいの心を格すとき、全体の秩序はおのずから維持されるという樂天主義(オプティミズム)にあった。「天尊く地卑くして、乾坤定まる。君臣の分は、既に天定に属す。各其の職を尽くすのみ」(『言志録』四八)——このような決定論を確信している一斎にダイナミックな政治の力学を期待することはないものねだりというものであろう。いわば泰平時代の治者の心術であって、一斎の言説が、多くの大名から歓迎されたゆえんもここにある。

『言志四録』の箴言は、天下泰平にふさわしい、洗練され、安定した官僚的秩序のイメージを的確に定着しているが、それは明晰で調和のとれた対句形式の文体のかたちとみごとに照応している。

古往の歴史は、是れ現世界にして、今來の世界は、是れ活歴史なり。(『言志録』一四三)

世清き時も、亦た就ち小失の処有り。世濁る時も、亦た就ち小得の処有り。(『言志晩録』一三五)

こうした対句形式は、一斎が親炙していた『易経』の二元的思考(陰陽と柔剛)にもとづくものである。「天地間の事物は必ず配合の理有り。極陽の者出づる有れば、必ず極陰の者有りて来り配す。人と物と皆然り」(『言志叢録』八四)。「配合の理」をうたがわぬ一斎にとって、世界の総体は靜的に、また相對的に把握される。その世界像はおそらくポーブが「人間論」第一書簡の結びとした「存在するものはすべて善い」(Whatever is, is right)とおどろくほど近いのである。

杉浦明平氏は、『言志四録』の文体について、「どの対句もほとんどいつも上下の平衡がとれて中和されてしまい、読むものを刺したり抵抗をひきおこしたりしえない。名句、名文ではあるが、常識をきれいに整理しただけで、いろは歌留多ほどの毒も含んでいないようである」(『維新前夜の文学』)と評している。たしかにその通りであるが、まさにそのところに『言志四録』の時代的意義があったことも否定できないと思う。『言志四録』の緻密に精鍊された章句には、過去の安定した世界の記憶が濃縮されている。それは幕末の動乱期を迎えた人びとに、不変の秩序が厳然として存在しているという幻想を約束することになるだろう。うつくしく整えられた言葉の鑄型が、既存の体制が崩落する予感におののく精神を支え、方向を指示するのである。言葉が作りだす見せかけの秩序が現実の世界の裂け目を隠蔽してしまうのだ。

一齋には西洋の時計を鍾愛する癖があり、常に座右に数器を置いて課業のたすけとしたという。この時計への趣味を表明した文章に「記洋製測時器」と題するものがあり、『愛日樓詩文』卷三に収められている。

……蓋^{おほ}ふに此の器、正倒俯仰、未だ嘗て錯乱せず。或ひは之を案上に放ち、或ひは之を壁間に搭^かせ、或ひは之を袖にし、或ひは之を佩^おぶ。皆可ならざるは無し。徐^{おも}に之を聴くに、輪擺(脱進機のこと)叩^{たた}憂、響きは蚕の嚙むが如し。就て之を觀るに両鍼(長針と短針)の遲速、移ること蠅^は歩(蟻の歩みの意)の如し。其の殻を刮^ひいて其の胎を觀るに及べば、則ち一切の機関、順逆転振、明堂腑位の如し。森然羅列、其の巧思精妙、殆んど名狀に易^かふべからず。

この「記洋製測時器」は、西洋時計の外形だけではなく、内部構造の微細にわたる分析的な文章であって、ヨーロッパの科学技術を導入するにあたって、漢文の素養がどれほどの有効性を発揮したかを示すひとつの見本であり、一齋の頭脳の強靱さをもうかがわせるが、大小の齒車がそれぞれの機能に即して整然と運行するこの小世界に、彼は安

定した体制の理想図をまざまざと見ていたのかもしれない(嘉永二年に一斎が進言した「時務策」の中には「凡芸術読書水利算数其外サマ／＼ノ事ニ至ル迄人々ノ功者ナル方へ／＼ト御用ヒ御座候へハ上ニハ唯一筋ノ繩ヲ御執被成候ノミニテ下ノ者トモハ皆喜ビ機関ハ如クニ働キ御用弁十分ニ足リ申候」という言葉がある)。

渋沢龍彦氏は、「ユートピアとしての時計」(『胡桃の中の世界』所収)というエッセイの中で、時計が作りだす循環的時間のイメージについてつぎのようにいっている。「歴史の時間は直線的时间であり、時計はこの直線的时间を加工して、無窮動の循環的時間という、一つの人工的時間に変化させてしまうのだ。円い時計の文字盤は、歴史の持続を否定した、永遠の時間の象徴でなくて何であろうか」。西洋時計に心ひかれる一斎のハイカラ趣味と、彼の昌平黌儒官という地位とは、一見不調和のように思われるけれども、官学の統率者として天下泰平の幻想を擁護する役割を担わなければならなかった一斎にとって、「歴史の時間」こそは真向から否定されなければならなかったものである。時計の脱進機のかすかな、しかし規則正しい響きに聞き入っていた一斎の耳が、かたくなに拒絶しようとしたものは、幕末の動乱期を間近く控えて高鳴りはじめた歴史の鼓動そのものであった。

二

明治維新の原動力のひとつを、海防論の盛行がもたらした「処士横議」と「志士」の横断的連結に求めようとした藤田省三氏の『維新の精神』のとらえ方は、きわめて魅力的な仮説であるが、すくなくとも幕末の志士たちの「処士横議」が、福沢の『旧藩情』に指摘されているような身分秩序に対応した閉塞的なコミュニケーション状況や、佐藤一斎の『言志四録』の形式主義的な文体に盛りこまれていた天下泰平の幻想を破砕する力として作用したことは認めていいだろう。たとえば、志士たちが往復書簡の中で愛用した「僕」「君」「諸友」「同志」などの人称代名詞は、藩の

障壁や「身分」「格式」「門閥」を軸とするタテ型のコミュニケーションをこえて、かれらが「志」とともにすることによる横断的な結合を獲得しはじめたことを示している。「処士横議」と貶称されたこのヨコ型のコミュニケーションが、新しい表現を切りひらいて行く過程を、吉田松陰の『講孟余話』を手がかりに考えてみることにしよう。

余一間の室に幽閉し、日夜五大洲を并吞せんことを謀る。人皆其の狂妄を笑はざるはなし。是れ他人の笑ふ者は、其の居る所狭窄にして、余が居の広大に若ざるを以てなり。吾が邦海禁の嚴なりしより、天下の人六十六国の外、寸板海に下ることを得ず。故に其の觀る所僅かに六十六国に止まる。狭窄と云べし。余独り一室に傲睨し、古今を達觀し、万国を通視す。是を以て覺えず知らず広大を致すことを得る。蓋し余他人と其の智能大小あるに非ず、独り其の居の広狭あるのみ。

行動の自由をうばわれた松陰は現実の世界から隔離された場にほかならぬ「幽室」を唯一の拠点に、彼の思想をおもむろに蒸溜して行く。思索の世界では、現実の「天下の広居」は「狭窄」に、狭隘な「幽室」は五大洲を并吞する広大な場に逆転する。このパラドックスはもちろん論理的遊戯ではない。下田踏海の壮図とその惨めな挫折、五大洲の周遊を企図したものが牢獄につながれて手足の自由もままならぬ情況に追いこまれてしまった運命の暗転——松陰が体験したこうした苛烈な劇が言葉による表現を獲得したとき、それはおのずから逆説の形式をとらなければならなかったのだ。松陰にとって言葉は現実を追認し、あるいは隠蔽する幻想的な用具としてあったのではなく、現実の制約を超出するかけがえのない論理の武器としてあったのだ。この文章の中で松陰は、「人皆其の狂妄を笑はざるはなし」と記している。しかし、自らの行動が狂妄であり、狂愚であることを誰よりも明晰に意識していたのも松陰その人なのである。松陰は不忠の臣であり、不孝の子であり、狂妄の獄囚であるといういっさいの負価から目をそむけようとはしない。黒船を目撃した直後、国許の兄にあてて、「昇平三百年」が「漸く変革の勢を兆し」はじめたと書き

おくった松陰にとって破砕すべき第一の目標は、一斉流の「天下泰平」の幻想であつた。「泰平」がたんなる幻想にすぎないことが暴露されたとき、世界は逆転し、人間的諸価値も顛倒する。太平の幻想に執着する才良の徒にかわつて変革をおそれぬ狂愚の士の登場が期待されなければならぬ。狂者は自らを狂者として肯定し、例外者の境位を自認することによって、現実の敗北を将来される勝利の確信へと転回させねばならぬ。松陰のばあい、「変革」とは政治の体制や機構の問題である以前に、人間的諸価値の転回を意味していたのである。とすれば、行動の自由を剝奪され、罪人の汚名を余儀なくされている獄囚こそは、まさにそのところで、天下泰平の安定した秩序や身分意識、思想の枠組からあらかじめ解き放たれている人間であり、「変革」の啓示をもっとも痛覺をこめて受けとめることができる種族なのである。松陰は野山獄で孟子の講義を開講するにあたって、同囚の人びとに学習の意義をつぎのように説いた。

……今の士大夫、学を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが為と、官を得んが為とに過ぎず。然れば功効を主とする者にして、殆んど義理を主とする者と異なる。思はざるべけん哉。嗚呼、世に読書人多くして、真の学者なき者は、学を為すの初め、其の志已に誤ればなり。……吾輩、逆境の人、乃ち善く逆境を説くことを得るのみ。癸丑、甲寅墨魯の変、皇国の大体を屈して陋夷の小醜に従ふに至る者は何ぞや。朝野の論、戦の必勝なく、転じて変故(旧慣を改めること)を滋出せんことを恐るゝに過ぎず。是れ亦た義理を捨て、功効を論ずるの弊、与に逆境を語るべからざる者に非ずや。

牢獄に幽閉されている人びとは、名利や官職などの現世的利益(功効)から遮断されているが故に、かえって学問を功利的な具としてではなく、その本質にさかのぼってきわめることができる。また日常的世界から放逐されて「逆境」に閉じこめられていること自体が、逆にペリー来航らしいの国家の「逆境」——危機的な状況を理解する手がかりに

なりうるというのだ。この開講の言葉をつらぬくディアレクティクな論理の展開は、松陰における学問の意味をそのもっとも深いところで解きあかしているばかりでなく、彼の文体の主要な魅力のひとつをかたちづけているパセティックな説得力の秘密にも触れているように思われる。

松陰と同時代の儒者・文人(佐藤一斎・斎藤拙堂・塩谷岩陰・林鶴梁など)がのこした文集は、ふつう、序・記・書・論・弁・説・銘・伝・賛というふうには整然とした分類が施されている。かれらがえらびだした語句は、内外の古典からの引照によって周到に補強され、文脈の布置結構は、古今の名家がつくりだした規範が厳格に守られる。いわば文章そのものが自己目的と化してしまうところまで、かれらは彫琢と推敲の努力をやめなかった気配である。こうして完成された文章は石に彫られた碑文を見るように冷やかで整った面貌を具えているが、流動してやまない心が言葉とはじめて出会うときの生きいきとした動きを欠いている。しかし、松陰は、「狂妄」「逆境」などの用例に見るように、現実を指示するとともに現実を隠蔽する幻想でもありうるという言葉の二重性に裂目を入れ、その矛盾そのものの中に現実の矛盾を洞察する。使いふるされた用語が、絶えず松陰をとりまく現実によって検証しなおされ、幻想的な側面が剝離されて行くところに、松陰の文体のダイナミズムが賭けられていたのである。

松陰はもともと行動の人であった。下田踏海の挙によって投獄されるまでの数年間に、彼の足跡は長崎から津軽の三厩にいたるまで日本全土に及んだ。この行動の人が幽囚を余儀なくされたときに、彼にゆるされたほとんど唯一の行動は、文章を書くことであり、同志に向けて志を述べることであった。行動から疎外された孤立無援の松陰には、彼自身の個を文章に託して表現する以外に他者とのむすびつきをつくりだす途が許されていなかったのである。松陰が言葉によって人びとのあいだに自己を解き放とうとしたとき、フォームの完成を至上とする近世的な文章観にかかわって、生動する表現としてのスタイルに個を賭ける近代的な文章観の開幕が予告されたのである。『講孟余話』はも

とも漢文体で書かれているにもかかわらず、彼が同囚の人びとや萩の若者たちとともに感じ、ともに考えようとした切実な願いは、その切迫した独得のリズムにまぎれもなくあらわれている。

吾甲寅以来身を関するに木を以てし、体を縛するに索を以てす。檻輿三百里を走り、犴狴六百日を渉る。今日禁錮稍紓ふと云ども足門徑を出でず、親近の外敢て他人に接せず、亦窮と云べし。然れども其の志に至りては松本一邑に一二の奇傑を生じ、以て忠孝の首、天下の唱とならんことを欲す。

「志」を同じくすることによって身分の障壁から解き放たれた松陰と門弟たちのばあい、先輩と後輩の落差さえも失われる。たとえば安政六年四月二十二日ごろ、門弟の入江杉藏に宛てた書簡はつぎのように書きだされる。

余り怒りよるととう／＼腹もなんにも立ぬ様になる。併し又立てたら夫も自然と恕してくれ。

この書簡は野山獄の松陰から岩倉獄の入江に宛てたもので、大原卿要駕策をめぐって同志や門弟から背かれた松陰の孤立無援の心境がほとんど口語文といってもいい文体に託されている。あるいはこの口語体から松陰の精神の錯乱を読みとる向きもあるかもしれないが、私はむしろ志士的な気概の底に流れつづけていた彼の優しさのしるしとしてうけとめたい。いわば素人である松陰の文章が私たちを感動させるとするならば、それは国事に慷慨する激切な行文のあわりに、思いもかけず比類のない率直さであらわれてしまうこうした彼の裸な心のかたちによるのである。

三

松陰をはじめとする幕末の志士たちは、「志」をとにもするもののあいだに横断的なコミュニケーションの可能性をきりひらき、幕藩体制の身分秩序に対応するタテ型のコミュニケーションを掘りくずして行ったが、かれらの呼びかけはとおく「草莽崛起の人」を志向していたにせよ、藤田氏いうように、「下層武士以下の民衆に広がる面におい